

原爆文学研究会報

第四一號

原爆文学研究会 二〇一三年六月

地下水脈のようなもの 西日本で暮らし続けている私にも、東北に行くつかの縁がある。そのひとつが福島市在住の詩人・和合亮一さんで、二〇〇七年に中原中也生誕一〇〇年記念イベントに呼んでいただいた以来、何度か足を運び、福島は親しみを感じる土地のひとつとなった。

東日本大震災の当日も、福島市で行われるはずだった和合さんの企画による詩のイベントのために、羽田行きの飛行機に搭乗した。ところが定刻を過ぎても機体は動かず、離陸許可が出ないというアナウンスが繰り返された。待機のために戻ったロビーで、大型テレビが映し出す津波の空撮を見た。文字通り言葉を失った。

音信不通となっていた和合さんから電話をいただいたのが翌々日。もちろんイベントは中止を余儀なくされていた。思いつく限りの支援に着手しながらも、福島との間に越えがたい隔たりを感じずにはいられなかった。

その後の和合さんの鬼神のような活動は周知の通りで、その起点となったのが twitter による「詩の礫」である。一月に山口にお招きして行ったトークの中で、幻に終わったイベントの準備のために手元に置いていた宮沢賢治や中原中也の詩集が、極限状況の中で言葉を紡ぐのを助けていたことを知った。賢治の詩に強く揺さぶられながら詩作を続けた中也の精神が、そこに生きていような気がした。

トークを振り返りながらふと思いついたのは、震災から一年後、福島で行われた復興祈願イベントの帰路、立ち寄った東京の小さなホールで聴いた東北民謡である。津軽三味線の高橋竹山さんと詩と音楽のコラボレーション集団「VOICE SPACE」の共演で、竹山さんらが震災後に各地

を訪れて取材した民謡の数々がそこで披露された。

はじめはどこか距離を置いた感じでそれを聴いていた。そのうちに会場から唱和の声が起こった。懐かしさに耐えかねてというように、恥ずかしげで小さな声だった。その声とひとつになった時、歌と演奏は、私のすぐ側で、いくぶんは体の内で鳴り響いているような気がした。

言葉や旋律の奥に流れる地下水脈のようなものがある。空疎な答弁や怒号やナルシステイックな語りの影にも、そのかすかな水音は響いている。それに共鳴するものを自分の中に持ち続けていたいというのが、今の私の願いである。

(中原豊)

第四一回 原爆文学研究会報告

二〇一三年四月二十七日(土)に、福島大学で第四一回研究会を開催しました。会員外からの参加も多く、四〇名近くの会となりました。

岡村氏の研究発表に対しては、「見えない」ということだけで括ると、そこから漏れてしまう芸術があるのではないか、「古めかしい写真の手法をあえて用いることでヒロシマとフクシマを繋げようとしているのではないか」、「Chim → Pom のフクシマに対する当事者性と、渋谷を拠点とする本来の当事者性との関係をどう考えたらよいか」、「Chim → Pom 作品を丸木美術館で展示することで彼らのゲリラ的要素が少なくなるのではないか」等の質疑がありました。

野坂氏の研究発表に対しては、「原爆の普遍化を自嘲する視点がテク



ストの中にないか」、「公的な不幸と私的な不幸を、個人化によって接続していく方法をどう評価するのか」、「精神分析を使うと見えにくくなるテクストの細部の問題をどう考えるか」、「デュラスを方法的に援用し、三島由紀夫を主題の補助線としているが、むしろ三島が方法的に、デュラスが主題に強く結びついているのではないか」等の質疑がありました。

また、講話として澤正宏氏（福島大学名誉教授）に話していただきました。講話の後にも質疑応答の時間を設け、「地震・原発をめぐる記憶の闘争がさらに複雑化すると思われるが、どのような文学研究・表象研究の可能性があるのか」、「今後の文学表現をどのように考えるか」、「外部」から問題にコミットメントすることについてどのように考えるか」等の質疑がありました。

翌四月二十八日（日）はフィールドワークを行い、約三〇名が参加しました。福島市や郡山市で様々な活動をしておられる方々から貴重なお話を伺うことができました。

◇ 研究発表 1

「非核芸術」の系譜 —— 広島から福島まで ——

岡村 幸宣

広島・長崎の原爆投下以後、核に抵抗する意志を込めた「非核芸術」と呼ぶべき表現は、丸木位里・俊夫妻の《原爆の図》、ベン・シャーン の《ラッキードラゴン・シリーズ》など、今日まで数多く生み出され続けてきた。それは、私たちの日常がいかに核の脅威と隣り合わせであったかの証でもある。そして、二〇一一年三月の福島原発事故を決定的な機会として、「非核芸術」は核兵器廃絶だけでなく、すべての核は人類と共存できないという根源的な問題に向かうことになった。

東京・渋谷駅の岡本太郎の壁画《明日の神話》に福島原発の絵をつけたして物議を醸した芸術家集団 China → Pom や、福島の人たちの体験を聞き、絵物語として油彩画《無主物》に描き続ける壺井明など、若い世代の表現も登場した。また、原発事故を近代社会の歪みの帰結点として捉え、福島以前の異なる歴史軸を福島に重ねて表現するという新たな展開も見えはじめた。画家の池田龍雄は、津波や原発事故を主題にした連作《蝕・壊・萌》に広島の詩人・峠三吉の詩を添えた。写真家の新井卓は、第五福竜丸が被ばくしたビキニ事件を意識しながら福島記憶を銀板写真に刻み、パフォーマンス・アーティストのイトー・タリーは、沖縄の米軍基地の映像を背景に重ねながら「放射能の怪物」と化して咆哮する。韓国人写真家の鄭周河は、美しく静謐な福島の風景を撮った写真に植民地時代の朝鮮詩人・李相和の「奪われた野にも春は来るか」という詩を冠した。

言うまでもなく、広島・長崎、ビキニ、チェルノブイリ、沖縄、朝鮮の植民地支配のいずれも、「三・一一」後の福島とは状況が異なる。しかし、そうした異なる歴史軸を重ね合わせるなかで浮かび上がる共通の問題意識

が、隠された現実を照射する可能性を持っているのではないか。見えないものを想像力によって露わにし、時代を越えて語り継ぐ物語となつて忘却を防ぐ「非核芸術」の持つ意味を、今の時代にこそ再考したい。

◇ 研究発表2

〈原爆〉という観念論

——鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』の考察——

野坂 昭雄

三島由紀夫賞を受賞した『六〇〇〇度の愛』は、「小さな心の中の事件と、原爆という大きな事件と」の「両方を考える」という問題意識の下に書かれた作品である。それは原爆という出来事を了解する方法としては、確かに重要なものである。今回の発表では、こうした鹿島田の問題意識を評価するために、精神分析学の発想に基づいてこの作品にアプローチしてみた。精神分析で問題になる「想像的疎外」という観点からすると、「女」と兄、母の関係は、父性的な象徴的秩序への参入の失敗によつて、おぞましい「アブジェクト」(クリステヴァ)に満ちたものになつている。兄に対する「女」の近親相姦的な欲望、兄と母との間に示唆される性的関係など、欲望や享樂をめぐる緊張状態にあつた「女」は、現実的な人間関係よりも、想像的で幻想的な関係に生きている。

例えば、「女」は長崎で青年と出会う。恐らく母への欲望を断念しようとして複数の女性と関係を持つ兄と同じように、「女」も複数の男性と関係を持っていた。だが、それは単に不在である兄の場所を「女」が占めるようになったのとは違う。彼女は兄と同じような男性を愛するのではなく、自分が兄を愛するように、自分が青年から愛されることを欲望するのだと考えられる。私見では、これは鹿島田が参照したデュラス

原作『二十四時間の情事』とは決定的に異なる点である。

小さな事件を大きな事件と重ね合わせるということは、原爆の個々の被爆者の苦悩を大きな出来事の中に回収することに等しいのだろう。考えてみれば、精神分析もキリスト教も、非常に強い普遍化の傾向を持つ。『六〇〇〇度の愛』でも、「女」にとつて原爆は抽象化された出来事で、自らの苦悩を映し出す鏡でしかあり得なかつた。だが、こうした空虚な抽象性を愚鈍なまでに描いた鹿島田の寓話には、ある種の強度があるのかもしれない。作品に点綴されたキリスト教的儀式は、毎年決まつた日に反復される原爆の追悼式典を彷彿とさせる。一回的な出来事が抽象化され反復されるのは、一体いかなることなのか。発表は中途半端なものとなつてしまつたが、非被爆者である鹿島田による徹底した原爆の抽象化を通して、この「反復」の問題を今後も考えてゆきたい。

◇ 講話

終わりなきオブセッション

——福島原発事故／隠蔽と強権を超えて原発0へ——

澤 正宏

電力会社からは「植民地」と呼ばれ、原発事故が起きれば誰も責任を取ることなく平気で「撤退」と言われる「福島」の現状を、「原爆文学研究会」の発表には相応しくないとはいつ、止むに止まれぬ思いで報告させて頂きました。内容を大きく五つに分け、なるべく事実、実態に基づいて話しました。

最初は、福島には恰も原発事故はなかつたかの様に繕おうとする国、東電の政策に起因する時間と、今後の原発事故処理には収束はなく、元の福島は取り戻せないという差し迫った心境に生きる時間との間に生きているということです。前者は安全の国際基準は1mmSv/年なのに、二

○mm Svまでなら避難解除するという国の方針などに、後者は子供の甲状腺被曝の実態、多数の原発事故の「関連死」（自殺を含む）などに、それぞれ顕著に見られることです。

次に、今回の報告の中心となる国、東電、県などの自治体による隠蔽と強権とですが、それらを他原発での例をも挙げながら、歴史的に掘り起こすところから現在に及ぶところまで話しました。常に隠蔽に伴っている裏工作の実態は想像を絶して凄まじいものです。三番目に原発事故はなぜ福島で起こったのかについて、それは国（被告）が主体性をもって原子炉の安全確保義務という責任を果たさず、原告側が法律に基づいて主張するトータルな安全審査の訴えを無視し、さらにこれらを司法が違法ではないと追認したことに尽きると、今回複製した全七巻の裁判資料を基にして話しました。

四番目に二〇一三年四月までの福島の現状を話しました。潜在する危機が多い中、直近の危機は一日に四〇〇トンの汚染地下水が流れ続けており、この漏水は六月まで止まないという事実です。除去できないトリチウムがあっても、国と東電は汚染処理をして海へ流す計画をしています。最後に事故の徹底的な原因究明の動きはなく、再稼働、外国への原発輸出がなされている事実などと、今後の課題を話しました。肝心なことは、原発0を目指すという後者はパターン化された思考ではなく、未来への道筋をつけておくということです。地球、人間の存続、全生命の危機を考えれば、本来、原発推進派と・脱（反）原発派とが争っている場合ではないのです。二七年後でも被曝後遺症が発症しているというウクライナからの生の声を謙虚に受け入れるべきです。

福島での原発事故は、人為と自然との両面から日本全体が存亡の危機に晒されていることをクローズアップしています。今後は、この認識を核兵器使用、原爆被曝、米軍基地、公害・薬害などといった国内にある問題と直接に闘っている人たちと共有する道に具体的に踏み出さなければならぬと考えます。

フィールドワーク印象記1

松本 滋恵



ミネロファーム

いた。私の同級の友人は、被爆者とは結婚できないと云われ二〇歳の若さで自ら命を絶った。

参加者は「ミネロファーム」と「かーちゃんの力プロジェクト」を見学した。両施設とも何よりも「安全」が第一といい、「安全」を度外視したら、今までの築き上げてきたプロジェクトが根底から崩れると懸念していた。さらに、第二、第三のプロジェクトの設立を望むと力強く言われたのが印象に残った。「ミネロファーム」では私達が乗車して来たバスのタイヤを消毒し、牛の飼料は外国産を使用しているとの事。ここまで徹底にされるのかと驚いた。

また「かーちゃんの力プロジェクト」でも、食材時、食品時も放射線

測量し”安全”を確認、カロリー、塩分までも計算し、愛情の込められた手作り弁当を販売していると説明。かーちゃん達と懇談しながら弁当を美味しく頂き、チームの皆さんの努力と意気込みを感じた。

「おだがいさまセンター」では被災者支援、生活再建に向けての取り組みを聞き、人間一人では生きて行けないのだと思った。

東京電力、政府も”安全”より経済を優先している。”安全”を優先していたならば、この度の事故は起こらなかったと思う。その上事故の反省はなく、ネズミの感電死のための停電、汚水漏れの事故と呆れ果てる。福島は幸福の島と言う意味で名付けられたと伺っている。一日も早く本来の福島であるよう応援し祈ってやまない。

フィールドワーク印象記2

仁平 政人

福島のフィールドワークでは、災後の復興や被災者支援に関わる三箇所を訪れた。はじめに、NPO法人福島農業復興ネットワークが運営する牧場・ミネロファームを訪れ、NPO事務局長と、場長の田中一正さんのお話を伺った。田中さんのお話は、飯館村で牧畜を営むようになってから、震災を経てミネロファームで働く現在に至るまでを詳細に語るものであった。震災後、情報が遮断されて災害の状況が分らず、放射線汚染についてジャーナリスト達に教えられた時にも、見えない「危機」に対する実感がなかったこと、しかしやがて退避せざるを得なくなり、多くの牛を処分することになったときの痛み……。こうした被災体験と、現状に対する思い、そしてその上で、福島で酪農に取り組み意志を語る田中さんの言葉は、一つ一つ深く印象に残っている。

次に向かったのは、「かーちゃんのカ・プロジェクト」の事務所であるあぶくま茶屋。こちらでは、代表の渡辺とみ子さんをはじめ「かーちゃん（女性農業者）」たちのお話を伺うとともに、手作りのお弁当をいただいた。1kgあたり20ペクレル以下という厳しい基準の下で、地元の食

材と郷土の味付けにこだわるそのお弁当は、美味しいとともに真摯な思いの伝わるものであった。食事中に手渡された、検査用として潰されたお弁当3食分を入れた袋の、ずしりとした重さも忘れがたい。

最後に、郡山市の仮設住宅地にある「おだがいさまセンター」を訪れ、震災直後から被災者支援を行ってきた天野和彦さんからお話を伺った。巨大避難所であった「ビックパレットふくしま」の当初の惨状と、「交流の場」の提供と「自治」の促進を通してそれを改善していった取り組みなど、天野さんのお話は極めて説得的で、多くのことを教えられた。この日伺ったお話はそれぞれ重みを持ち、単純な言葉で印象をまとめることはできない。ただ、福島をはじめとした現在の状況に対して、安易に理解したつもりになることなく慎重にかつ切実に考え続けなければならぬということ、あらためて心に刻まれた。会員でないにもかかわらず、貴重な機会に参加させて頂いたことに、心より感謝を申し上げたい。



あぶくま茶屋



おだがいさまセンター

彙報

第四一回 原爆文学研究会

【一日目】

○日時 二〇一三年四月二十七日(土) 一三時より

○会場 福島大学S・24教室

○研究発表

発表1 「非核芸術」の系譜——広島から福島まで」 岡村 幸宣

発表2 〈原爆〉という観念論

——鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』の考察—— 野坂 昭雄

講話 終わりになきオプセッション——福島原発事故／隠

蔽と強権を超えて原発0へ—— 澤 正宏

【二日目】

○日時 二〇一三年四月二十八日(日) 九時半より

○フィールドワーク

ミネロファームく あぶくま茶屋く おだがいさまセンター

機関誌 「原爆研究文学」 第一二号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一二号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一三年

九月中旬、データファイル(Wordか一太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八二四一〇一八〇福岡市城南区七隈八一一九一一

福岡大学人文学部中野和典研究室

原爆文学研究会ホームページ掲載文更新

長野秀樹代表世話人が作成した文言をもとに世話人会で検討し、さらに会員の意見を反映させて完成した「この会について」を、ホームページの「会のご案内」に追加しました。「発足の辞」はそのままです。

編集後記

四月の研究会から早くも二ヶ月が経ちました。私は会前夜に福島入りし、会当日の午前中は福島駅周辺を歩きました。その日は少し肌寒かったもののよく晴れていました。福島県庁そばの阿武隈川の川原の様子はのどかに見え、そして、見えない放射能を想像することのいかに難しいことか、今更ながら気づかされたのでした。会に参加された皆様も、されなかつた皆様も、きつとそれぞれ考えるところがあったと思います。

本号では発表要旨とフィールドワーク印象記を掲載し、福島での二日間の内容をお伝えするものとなっております。会員外からご寄稿いただいた澤正宏氏と仁平政人氏に感謝申し上げます。また、中原豊氏による巻頭エッセイも福島に関連するものですので、ぜひ合わせてお読みください。福島開催にあたり、研究会場のセッティングから、フィールドワークの旅程の検討、訪問先との交渉まで、高橋由貴氏に大変お世話になりました。本当にありがとうございました。次回研究会は八月三十一日、九月一日に、神戸市外国語大学で開催します。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>